

## 士師記

第一章「ヨシユアの死にたるのちイスラエルの子孫エホバに問ひていひけるはわれらの中孰か先に攻め登りてカナン人と戦ふべきやニエホバいひたまひけるはユダ上るべし視よ我此國を其の手に付すとニユダその兄弟シメオンに言ひけるは我と共にわが領地にのぼりてカナン人と戦へわれもまた偕に汝の領地に往べしとここにおいてシメオンかれともにもゆけり四ユダすなはち上りゆきけるにエホバその手にカナン人とペリジ人とを付したまひたればぜくにて彼ら一萬人を殺し五またぜくにおいてアドニベゼクにゆき逢ひこれと戦ひてカナン人とペリジ人を殺せり六しかるにアドニベゼク逃れ去りしかばそのあとを追ひてこれを執へその手足の巨擘を斫りはなちたれば七アドニベゼクいひけるは七十人の王たちかつてその手足の巨擘を斫られて我が食几のしたに肩を拾へり神わが曾て行ひしところをもてわれに報いたまへるなりと衆之を曳てエルサレムに至りしが其處にしねりハユダの子孫エルサレムを攻めてこれを取り刃をもてこれを撃ち邑に火をかけたなり九かくてのちユダの子孫山と南方の方および平地に住めるカナン人と戦はんとて下りしが二〇ユダまづヘブロンに住るカナン人を攻めてセシヤイ、アヒマンおよびタルマイを殺せり一ヘブロンは舊の名はキリアテアルバなり二またそこより進みてデビルに住るものを攻む一デビル

の舊の名はキリアテセベルなり」三時にカレブいひけるはキリアテセベルをうちてこれを取るものにはわが女アクサをあたへて妻となさんとニカレブの舎弟ケナスの子オテニエルこれを取ればすなはちその女アクサをこれが妻にあたふニ四アクサ往くときおのれの父に田圃を求めんことを夫にすすめたりしがつひにアクサ驢馬より下りければカレブこれは何事ぞやといふにニ五答へけるはわれに恵賜をあたへよなんぢ南の地をわれにあたへたればねがはくは源泉をもわれにあたへよとここにおいてカレブ上の源泉と下の源泉とをこれにあたふニ六モーセの外舅ケニの子孫ユダの子孫と偕に棕櫚の邑よりアラドの南なるユダの野にのぼり來りて民のうちに住居せりニ七茲にユダその兄弟シメオンとともに往きてゼバテに住るカナン人を撃ちて盡くこれを滅ぼせり是をもてその邑の名をホルマと呼ぶニ八ユダまたガザと其の境アシケロンとその境およびエクロンとその境を取りニ九エホバ、ユダとともに在したればかれつひに山地を手に入れたりしが谷に住る民は鐵の戰車をもちたるが故にこれを逐出すこと能はざりきニ〇衆モーセのかつていひし如くヘブロンをカレブに與ふカレブそのところよりアナクの子孫の子をおひ出せりニ一ベニヤミンの子孫はエルサレムに住るエブス人を追出さざりしりかばエブス人は今日に至るまでベニヤミンの子孫とともにエルサレムに住ふニ茲にヨセフの族またベテルをさして攻め上るエホバこれと偕に在しきニヨセフの

族すなはちベテルを窺察しむ（此邑の舊の名はルズなり）二四その間者邑より人の出来るを見てこれにいひけるは請ふわれらに邑の入口を示せさらば汝に恩慈を施さんと五彼邑の入口を示したればすなはち刃をもて邑を撃てり然ど彼の人と其家族をばみな縦ち遣りぬ二六その人へて人の地にゆき邑を建てルズと名けたり今日にいたるまでこれを其名となす二七マナセはベテシヤンとその村里の民タアナクとその村里の民ドルとその村里の民イプレアムとその村里の民メギドンとその村里の民を逐ひ出さざりきカナン人はなほその地に住み居る二八イスラエルはその強なりしときカナン人をして貢を納れしめたりしが之を全く追ひいだすことは焉ざりき二九エフライムはゲゼルに住るカナン人を逐ひいださざりきカナン人はゲゼルにおいてかれらのうちに住み居たり三〇ゼブルンはまたキテロンの民およびナハラルの民を逐ひいださざりきカナン人かれらのうちに住みて貢ををさむるものとなりぬ三二アセルはアツコの民およびシドン、アヘラブ、アクジブ、ヘルバ、アピク、レホブの民を逐ひ出さざりき三三アセル人は其地の民なるカナン人のうちに住み居たりそはこれを逐ひ出さざりしゆゑなり三三ナフタリはベテシメシの民およびベテアナテの民を逐ひ出さずその地の民なるカナン人のうちに住み居たりベテシメシとベテアナテの民はつひにかれらに貢を納むるものとなりぬ三四アモリ人ダンの子孫を山におひこみ谷に下ることを得させざりき三五アモリ人はなほヘレス

山アヤロン、シヤラビムに住み居りしがヨセフの家の手力勝りたれば終に貢を納むるものとなりぬ三六アモリ人の界はアクラビムの阪よりセラを経て上に至れり

第二章一エホバの使者ギルガルよりボキムに上りていひけるは我汝等々をエジプトより上らしめわが汝らの先祖に誓ひたる地に携へ來れりまた我いひけらくわ汝らと締べる契約を絶てやぶることあらじ二汝らはこの國の民と契約を締ぶべからずかれらの祭壇を毀つべしとしかるに汝らはわが聲に従はざりき汝ら如何なれば斯ることをなせしや三我またいひけらくわ汝らの前より彼らを追ふべからずかれら反て汝等の肋を刺す荆棘とならんまた彼らの神々は汝等の害となるべし四エホバの使これらの言をイスラエルのすべての子孫に語しかば民聲をあげて哭ぬ五故に其所の名をボキム（哭者）と呼ぶかれら彼所にてエホバに祭物を獻げたり六ヨシユア民を去しめたればイスラエルの子孫おのおのその領地におもむきて地を獲たり七ヨシユアの世にありし間またヨシユアより後に生きたる長老等の世にありしあひだ民はエホバに事へたりこの長老等はエホバのかつてイスラエルのために成したまひし諸の大なる行爲を見しものなり八エホバの僕ヌンの子ヨシユア百十歳にて死り九衆人エフライムの山のテムナテヘレスにあるかれらの産業の地においてガアシ山の北にこれを葬れり一〇かくてまたその時代のものごとくとくその先祖のもとにあつめられその後に至りて他の時代おこ

りしが是はエホバを識すまたそのイスラエルのために爲したまひし行爲をも識ざりきニイスラエルの子孫エホバのまへに惡きことを作してバアリムにつかへニかつてエジプトの地よりかれらを出したまひしその先祖の神エホバを棄てて他の神すなはちその四周なる國民の神にしたがひ之に跪つぎてエホバの怒を惹起せりニ即ちかれらエホバをすててバアルとアシタロテに事へたれば四エホバはげしくイスラエルを怒りたまひ掠むるもの手にわたして之を掠めしめかつ四周なるもろもろの敵の手にこれを賣たまひしかばかれらふたたびその敵の前に立つことを得ざりきニ五かれらいつこに往くもエホバの手これに災をなしぬ是はエホバのいひたまひしごとくエホバのこれに誓ひたまひしごとしここにおいてかれら惱むこと甚だしかりしが六エホバ士師を立てたまひたればかれらこれを掠むるもの手よりすくひ出したりニ七然るにかれらその士師にもしたがはず反りて他の神を慕て之と淫をおこなひ之に跪き先祖がエホバの命令に従がひて歩みたることろの道を頓に離れ去りてその如くには行はざりきニ八かれらのためにエホバ士師を立てたまひし時に方りてはエホバつねにその士師とともに在しその士師の世に在る間はエホバかれらを敵の手よりすくひ出したまへり此はかれらおのれを虐げくるしむるものありしを呻きかなしめるによりてエホバ之を哀れみたまひたればなりニ九されどその士師の死のちまた戻きて先祖よりも甚だしく邪曲を行ひ他

の神にしたがひてこれに事へ之に跪きておのれの行爲を息めずその頑固なる路を離れざりきニ〇是をもてエホバはげしくイスラエルをいかりていひたまはく此民はわがかつてその列祖に命じたる契約を犯し吾聲に従がはざるがゆゑにニ我もまたいまよりはヨシユアがその死しときに存しおけるいづれの國民をもかれらのまへより逐ひはらはざるべしニ三此は我イスラエルがその先祖の守りしごとくエホバの道を守りてこれに歩むやいなやを試みんがためなりとニ四エホバはこれらの國民を逐はらふことを速にせずして之を遣しおきてヨシユアの手に付したまはざりしなり

第三章 エホバが凡てカナンの諸の戦争を知ざるイスラエルの者どもをこころみんとて遣しおきたまへる國民は左のごとしニ一こはただイスラエルの代々の子孫特にいまだ戦争を知ざるものにこれををしへ知らしめんがためなりニ三即ちペリシテ人の五人の伯すべてのカナン人シドン人およびレバノン山に住みてバアルヘルモンの山よりハマテに入るところまでを占めたるヒビ人はなり四これらをもてイスラエルをこころみかれらがエホバのモーセによりてその先祖に命じたまひし命令に遵ふや否を可知りしなり五イスラエルの子孫はカナン人へテ人アモリ人ペリジ人ヒビ人エブス人のうちに住みかれらの女を妻に娶りまたおのれの女をかれらの子に與へかつかれらの神に事へたり七斯くイスラエルの子孫エホバのまへに惡をおこなひ己れの神な

るエホバをわすれてバアリムおよびアシラに事へたりハ是においてエホバはげしくイスラエルを怒りてこれをメソポタミヤの王クシャンリシヤタイムの手に賣り付したまひしかばイスラエルの子孫はおよそ八年のあひだクシャンリシヤタイムにつかへたり九茲にイスラエルの子孫エホバによはりしかばエホバはイスラエルの子孫の爲にひとり救者を起して之を救はしめ給ふすなはちカレブの舎弟ケナズの子オテニエル是なり○エホバの靈オテニエルにのぞみたれば彼イスラエルを治め戦ひに出づエホバ、メソポタミヤの王クシャンリシヤタイムをその手に付したまひたればオテニエルの手クシャンリシヤタイムに勝ことを得たりニかくて國は四十年のあひだ太平なりきケナズの子オテニエルつひに死りにイスラエルの子孫復エホバの眼のまへに悪をおこなふエホバかれらがエホバのまへに悪をおこなふによりてモアブの王エグロンをつよくなしてイスラエルに敵せしめたまへりニエグロンすなはちアンモンおよびアマレクの子孫を招き聚め往きてイスラエルを撃ち櫻欄の邑を取り四ここにおいてイスラエルの子孫は十八年のあひだモアブの王エグロンに事へたりしがニイスラエルの子孫エホバに呼はりけるときエホバかれらの爲に一個の救者を起したまふすなはちベニヤミン人ゲラの子なる左手利捷のエホデ是なりイスラエルの子孫かれを以てモアブの王エグロンに餽物せり一六エホデ長一キユビトなる兩刃の劍を作らせこれを衣のしたに右の股のあ

たりにおび一七餽物を齎してモアブの王エグロンのもとに詣るエグロンは甚だ肥たる人なりき一八さて餽物を獻ぐることをはりしかば彼餽物を負ひ來りしものをかへし去らしめ一九自らはギルガルの傍なる石像の在る所より引き回していひけるは王よ我爾に告ぐべき密事ありと王人拂を命じたればその旁に立つものみな出で去りぬ二〇エホデすなはち王のところに入來り時に王はひとり上なる涼殿に坐し居たりしがエホデ我神の命に由りて爾に傳ふべきことありといひければ王すなはち座より起に二エホデ左の手を出し右の股より劍を取りてその腹を刺せり三柄もまた刃とともに入りたりしが脂肪肉刃を塞ぎて之を腹より抜き出すことあたはずその鋒鋭うしろに出づ三エホデすなはち廊をとほりてその後樓の戸を閉てこれを鎖せり四その出でしち王の僕來りて樓の戸の鎖したるを見いひけるは王はかならず涼殿の間に足を蔽ひ居るならんと五僕ども耻るまでに俟居たれど王樓の戸をひらかざれば鑰をとりて之を開き見るにその君は地に仆れて死をるニ六エホデは彼等の猶豫ふ間に逃れて石像の在るところを過りセイラテに遁げゆけりモかれ既に至りエフライムの山に筈を吹きければイスラエルの子孫これとともに山より下るエホデこれを導けりニ八かれ人衆にいひけるは我に續て來れエホバ汝等の敵モアブ人を汝等の手に付したまふなりここにおいてかれらエホデにしたがひて下りモアブにおもむくところのヨルダンの津を取りて一人も渡るこ

とを允さざりき元そのとき彼らモアブ人およそ一萬人を殺せり是皆肥太たる勇士なりそのうち一人も脱れたるものなしモアブはその日イスラエルの手に服せり而して國は八十年の間太平なりき三エホデの後にアナテの子シヤムガルといふものあり牛の策を以てペリシテ人六百人を殺せり此人もまたイスラエルを救へり

第四章一エホデの死たるのちイスラエルの子孫復エホバの目前に惡を行しかばニエホバ、ハゾルにて世を治むるカナンの王ヤビンの手に之を賣たまふヤビンの軍勢の長はシセラといふ彼異邦人のハロセテに住居り三鐵の戰車九百輛を有居て二十年の間イスラエルの子孫を甚だしく虐げしかばイスラエルの子孫エホバに呼はれり四當時ラヒドテの妻なる預言者デボラ、イスラエルの士師なりき五彼エフライムの山のラマとベテルの間に在るデボラの棕櫚の樹の下に坐せりイスラエルの子孫はその許に上りて審判を受く六デボラ人をつかはしてケデシ、ナフタリよりアビノアムの子バラクを招きこれにいひけるはイスラエルの神エホバ汝に斯く命じたまふにあらざるやいはく汝ナフタリの子孫とセブルンの子孫とを一萬人ひきぬゆきてタボル山におもむけ七我ヤビンの軍勢の長シセラおよびその戰車とその群衆とをキシオン河に引き寄せて汝のもとに至らせ之を汝の手に付すべしハバラク之にいひけるは汝も我ともにもゆかば我往べし然ど汝も我ともに行ずば我行ざるべし九デボラ

いひけるは我かならず汝ともにも往くべし然ど汝は今往くところの途にては榮譽を得ることなからんエホバ婦人の手にシセラを賣りたまふべければなりとデボラすなはち起ちてバラクと共にケデシに往けり一〇バラク、セブルンとナフタリをケデシに招き一萬人を従へて上るデボラもまた之ともにも上れり一一ここにケ二人へベルといふ者あり彼はモーセの外舅ホバブの裔なるがケニを離れてケデシの邊なるザアナイムの橡の樹のかたはらにその天幕を張り居たり一二衆アビノアムの子バラクがタボル山に上れるよしをシセラに告げたりければ三シセラそのすべての戰車すなはち鐵の戰車九百輛およびおのれともにも在るすべての民を異邦人のハロセテよりキシオン河に招き集へたり三四デボラ、バラクにいひけるは起よ是エホバがシセラを汝の手に付したまふ日なりエホバ汝に先き立ちて出でたまひしにあらずやとバラクすなはち一萬人をしたがへてタボル山より下る一五エホバ刃をもてシセラとその諸の戰車およびその全軍をバラクの前に打敗りたまひたればシセラ戰車より飛び下り徒歩になりて遁れ走れり一六バラク戰車と軍勢とを追ひ撃て異邦人のハロセテに至れりシセラの軍勢は悉く刃にたふれて残れるもの一人もなかりしが一七シセラは徒歩にて奔りケ二人へベルの妻ヤエルの天幕に來れり是はハゾルの王ヤビンとケ二人へベルの家とは互ひに睦じかりしゆゑなり一八ヤエル出來りてシセラを迎へ之にいひけるは來れわが主入り來れ怖るる

なかれとシセラその天幕に入ればヤエル被をもてこれを覆へり一九シセラにいひけるはねがはくは少しの水をわれに飲ませよ我渴けりとヤエルすなはち乳囊を啓きて之に飲ませまた之を覆へり二〇シセラまたにいひけるは天幕の門邊に立て居れもし人來り汝にとぶて誰かここに居るやといはば否と答ふべしと二 彼疲れて熟睡せしかばへベルの妻ヤエル天幕の釘子を取り手に鎚を携へてそのかたはらに忍び寄り鬢のあたりに釘子をうちこみて地に刺し通したればシセラすなはち死たり三バラク、シセラを追ひ來りしときヤエル之を出むかへていひけるは來れ我汝の索るところの人を示さんとかれそのところに入て見にシセラ鬢のあたりに釘子うたれて死たふれをる三その日に神カナンの子ヤエルの子孫のまへに打敗りたまへり二四かくてイスラエルの子孫の手ますます強くなりてカナンの王ヤビンに勝ちつひにカナンの王ヤビンを亡ぼすに至れり

第五章一その日デボラとアビノアムの子バラク謳ひていはく二イスラエルの首長みちびきをなし民また好んで出でたればエホバを頌美よ三もろもろの王よ聽けもろもろの伯よ耳をかたづけよ我はそのエホバに謳はん我はイスラエルの神エホバを讃へん四ああエホバよ汝セイルより出でエドムの野より進みたまひしとき地震ひ天また滴りて雲水を滴らせたり五もろもろの山はエホバのまへに撼動き彼のシナイモイスラエルの神エホバのまへ

に撼動けり六アナテの子シヤムガルのときまたヤエルの時には大路は通行する者なく途行く人は徑を歩み七イスラエルの村莊には住者なく住む者あらずなりけるがつひに我デボラ起り我起りてイスラエルに母となる八人々新しき神を選びければ戰鬥門におよべりイスラエルの四萬人のうちに盾或は鎧の見しことあらんや九吾が心は民のうちに好んでいでたるイスラエルの有司等に傾けり汝らエホバを頌美よ一〇しろき驢馬に乗るもの毛氈に坐するものおよび路歩む人よ汝ら謳ふべし一 矢叫の聲に遠かり水汲むところにおいてエホバの義しき所爲をとなへそのイスラエルを治理めたまふ義しき所爲を唱へよその時エホバの民は門に下れり二興よ起よデボラ興よ起よ歌を謳ふべし起てよバラク汝の俘虜を虜きたれアビノアムの子よ三其時民の首長等の殘餘者くだり來るエホバ勇士の中にいまして我にくだりたまふ一四エフライムより出る者ありその根アマレクにありベニヤミン汝のあとにつきて汝の民の中にあるマキルよりは牧伯下りゼブルンよりは采配を執るものいたる一五イツサカルの伯たちはデボラとともに居るイツサカルはバラクとおなじく足の進みて平地に至るルベンの河邊にて大に心にはかる事あり一六 何故に汝は圏のうちに止まりて羊の群に笛吹くを聽くやルベンの河邊にて大に心に考ふることあり一七ギレアデはヨルダンの彼方に臥し居る何故にダンは舟のかたはらに止まりしやアセルは濱邊に坐してその港に臥し居る一八ゼブルンは生命を捐

て死を冒せる民なり野の高きところに居るナフタリまた是の如し一九もろもろの王來りて戰へる時にカナンのもろもろの王メギドンの水の邊においてタアナクに戰へり彼ら一片の貨幣をも獲ざりき二〇天よりこれを攻るものありもろもろの星其の道を離れてシセラを攻むニキシオンの河を押し流しぬ是彼の古への河キシオンの河なりわが靈魂よ汝ますます勇みて進め三その時馬の蹄は強きももの馳に馳るに由りて地を踏鳴せり三エホバの使いひけるはメロズを誑ふべし汝ら重ね重ねその民を誑ふべきなり彼等來りてエホバを助けずエホバを助けて猛者を攻めざればなり二四ケ二人へベルの妻ヤエルは婦女のうちの最も頌むべき者なり彼は天幕に居る婦女のうち最も頌むべきものなり二五シセラ水を乞ふにヤエル乳を與ふ即ち貴き盤に乳の油を盛てささぐ二六ヤエル釘子に手をかけ右の手に重き椎をとりてシセラを打ちその頭を碎きその鬢のあたりをうちて貫ぬくニモシセラ、ヤエルの足の間に屈みて仆れ僵しその足のあはひに屈みて仆れその屈みたる所にて仆れ亡ぬハシセラの母窓より望み格子のうちより叫びて言ふ彼が車のきたること何て遅きや彼が馬の歩何てはかどらざるや二九その賢き侍女こたへをなす(母また獨語して斯いへり)三〇かれら獲ものしてこれを分たざらんや人ごとに一人二人の女子を獲んシセラの獲るものは彩る衣ならんその獲る者は彩る衣にして文繡を施せる者ならん即ち彩りて兩面に文繡をほどこせる衣をえてその頸にまとはんと

三二 エホバよ汝の敵みな是のごとくに亡びよかしまたエホバを愛するものは日の眞盛に昇るが如くなれよかしとかくて後國は四十年のあひだ太平なりき  
 第六章 イスラエルの子孫またエホバの目のまへに惡を行ひたればエホバ七年の間之をミデアン人の手に付したまふニミデアン人の手イスラエルにかてりイスラエルの子孫はミデアン人の故をもて山にある窟と洞穴と要害とをおのれのために造れり三イスラエル人時種してありける時しもミデアン人アマレキ人及び東方の民上り來りて押寄せ四イスラエル人に向ひて陣を取り地の産物を荒してガザにまで至りイスラエルのうちに生命を維くべき物を遺さず羊も牛も驢馬も遺ざりき五夫この衆人は家畜と天幕を携へ上り蝗蟲の如くに數多く來れりその人と駱駝は數ふるに勝ず彼ら國を荒さんとて入りたる六かかりしかばイスラエルはミデアン人のために大いに衰へイスラエルの子孫エホバに呼れりセイラエルの子孫ミデアン人の故をもてエホバに呼はりしかばエホバひとり預言者をイスラエルの子孫に遣りて言しめたまひけるはイスラエルの神エホバ斯くいひたまふ我がつて汝らをエジプトより上らせ汝らを奴隸たるの家より出し九エジプト人の手およびすべて汝らを虐ぐるものの手より汝らを拯ひいだし汝らの前より彼らを追ひはらひてその邦土を汝らに與へたり一〇我また汝らに言り我は汝らの神エホバなり汝らが住み居るアモリ人の國の神を懼るるなかれとしかるに汝らは

我が聲に從はざりき二茲にエホバの使者來りてアビエゼル人ヨアシの所有なるオフラの橡の樹のしたに坐す時にヨアシの子ギデオン、ミデアン人に奪はれざらんために酒榨のなかに麥を打ち居たりしがニエホバの使之に現れて剛勇丈夫よエホバ汝とともに在すといひたれば三ギデオン之にいひけるはああ吾が主よエホバ我らと偕にいまさばなどでこれらのことわれらの上に及びたるやわれらの先祖がエホバは我らをエジプトより上らしめたまひしにあらずやといひて我らに告たりしその諸の不思議なる行爲は何處にあるや今はエホバわれらを棄てミデアン人の手に付したまへり四エホバ之を顧みていひたまひけるは汝此汝の力をもて行きミデアン人の手よりイスラエルを拯ひいだすべし我汝を遣すにあらすや五ギデオン之にいひけるはああ主よ我何をもてかイスラエルを拯ふべき視よわが家はマナセのうちの最も弱きもの我はまた父の家の最も卑賤きものなり六エホバ之にいひたまひけるは我かならず汝とともに在ん汝は一人を撃がごとくにミデアン人を撃つことを得ん七ギデオン之にいひけるは我もし汝のまへに恩を蒙るならば請ふ我と語る者の汝なる證據を見せたまへ八ねがはくは我復ひ汝に來りわが祭物をたづさへて之を汝のまへに供ふるまでここを去たまふなかれ彼いひたまひけるは我汝の還るまで待つべし九ギデオンすなはち往て山羊の羔を調へ粉一エパをもて無酵パンをつくり肉を筐にいれ羹を壺に盛り橡樹の下にもち出て之を

供へたれば十神の使之にいひたまひけるは肉と無酵パンをとりにて此巖のうへに置き之に羹を斟けとすなはちそのごとくに行ふニエホバの使手にもてる杖の末端を出して肉と無酵パンに觸れたりしかば巖より火燃えあがり肉と無酵パンを焼き盡せりかくてエホバの使去てその目に見ずなりぬ三ギデオンはおいて彼がエホバの使者なりしを覺りギデオンいひけるはああ神エホバよ我面を合せてエホバの使者を見たれば將如何せんニエホバ之にいひたまひけるは心安かれ怖るる勿れ汝死ぬることあらじ三四ここにおいてギデオン彼所にエホバのために祭壇を築き之をエホバシヤロムと名けたり是は今日に至るまでアビエゼル人のオフラに存る五其夜エホバ、ギデオンにいひ給ひけるは汝の父の少き牡牛および七歳なる第二の牛を取り汝の父のもてるバルの祭壇を毀其上なるアシラの像を斫り付し六汝の神エホバのためにこの堡砦の頂において次序をただし七祭壇を築き第二の牛を取りて汝が斫り倒せるアシラの木をもて燔祭を供ぐべし八ギデオンすなはちその僕十人を携へてエホバのいひたまひしごとく行へりされど父の家のものどもおよび邑の人を怖れたれば晝之をなすことを得ず夜に入りて之を爲り九邑の衆朝興出て視にバルの祭壇は摧け其の上なるアシラの像は斫付されて居り新に築る祭壇に第二の牛の供へてありしかば一元たがひに此は誰が所爲ぞやと言ひつつ尋ね問ひけるに此はヨアシの子ギデオンの所爲なりといふものありたれば

三〇 邑の人々ヨアシにむかひ汝の子を曳き出して死なしめよそは彼バアルの祭壇を推き其上に在しアシラの像を研仆したればなりといふ三三 ヨアシおのれの周圍に立るすすべてのものにいひけるは汝らはバアルの爲に争論ふや汝らは之を救んとするや之が爲に争論ふ者は朝の中に死べしバアルもし神ならば人其祭壇を推きたれば自ら争論ふ可なりと三三 是をもて人衆ギデオソその祭壇を推きたればバアル自ら之といひあらそはんといひて此日かれをエルバアル(バアルいひあらそはん)と呼なせり三三 茲にミデアン人アマレク人および東方の民相集まりて河を濟りエズレルの谷に陣を取りが三四 エホバの靈ギデオソに臨みてギデオソ 籟を吹たればアビエゼル人集りて之に従ふ三五 ギデオソ 徧くマナセに使者を遣りしかばマナセ人また集りて之に従ふ彼またアセル、ゼブルン及びナフタリに使者を遣りしにその人々も上りて之を迎ふ三六 ギデオソ神にいひけるは汝かつていひたまひしごとくわが手をもてイスラエルを救はんとしたまはば三七 視よ我一箇の羊の毛を禾場におかん露もし羊毛のみにおきて地はすべて燥きをらば我之れによりて汝がかつて言たまひし如く吾が手をもてイスラエルを救ひたまふを知んと三八 すなはち斯ありぬ彼明る朝早く興きいで羊毛をかき寄てその毛より露を搾りしに鉢に滿つるほどの水いできたる三九 ギデオソ神にいひけるは我にむかひて怒を發したまふなかれ我をしていま一回いはしめたまへねがはくは我をして羊の毛をもていま

一回試さしめたまへねがはくは羊毛のみを燥して地には悉く露あらしめたまへと四〇 その夜神かくの如くに爲したまふすなはち羊毛のみ燥きて地には凡て露ありき第七章一 斯てエルバアルと呼るるギデオソおよび之とともにあるすべての民朝風に興きいでて八口デの井のほとりに陣を取るミデアン人の陣はかれらの北の方にあたりモレの山に沿ひ谷のうちにある三二 エホバ、ギデオソにいひたまひけるは汝とともに在る民は餘りに多ければ我その手にミデアン人を付さじおそらくはイスラエル我に向ひ自ら誇りていはん我わが手をもて己を救へりと三三 されば民の耳に告示していふべし誰にても懼れ慄くものはギレアデ山より歸り去るべしとここにおいて民のかへりしもの二萬二千人あり殘しものは一萬人なりき四 エホバまたギデオソにいひたまひけるは民なほ多し之を導きて水際に下れ我かしこにて汝のために彼らを試みんおほよそ我が汝に告て此人は汝とともに行くべしといはんものはすなはち汝とともに行くべしまたおほよそ我汝に告て此人は汝とともに行くべからずといはんものはすなはち行くべからざるなり五 ギデオソ民をみちびきて水際に下りしにエホバのにいひたまひけるはおほよそ犬の飮るがごとくその舌をもて水を飮るものは汝之を別けおくべしまたおほよそ其の膝を折り屈みて水を飮むものをも然すべしと六 手を口にあてて水を飮しもの數は三百人なり餘の民は盡くその膝を折り屈みて水を飮り七 エホバ、ギデオソに

いひたまひけるは我水を飮たる三百人の者をもて汝らを救ひミ  
 デアン人を汝の手に付さん餘の民はおのおの其所に歸るべしと  
 ハここにおいて彼ら民の兵糧とその菰を手にうけとれりギデオ  
 ンすなはちすべてのイスラエル人を各自その天幕に歸らせ彼の  
 三百人を留めおけり時にミデアン人の陣はその下の谷のなかに  
 ありき九その夜エホバ、ギデオンにいひたまはく起よ下りて敵  
 陣に入るべし我之を汝の手に付すなり。されど汝もし下るこ  
 とを怖れなば汝の僕フラを伴ひ陣所に下りて。彼らのいふ所  
 を聞べし然せば汝の手強くなりて汝敵陣にくだることを得ん  
 とギデオンすなはち僕フラとともに下りて陣中にある隊伍の  
 ほとりに至るにニミデアン人アマレク人およびすべて東方の  
 民は蝗蟲のごとくに數衆く谷のうちに堰しをりその駱駝は濱の  
 砂の多きがごとくにして數ふるに勝すニミギデオン其處に至り  
 しに或人その伴侶に夢を語りて居りすなはちいふ我夢を見たり  
 しが夢に大麥のパンひとつミデアンの陣中に轉びいりて天幕に  
 至り之をうち休し覆したれば天幕倒れ臥り。其の伴侶答へて  
 いふ是イスラエルの人ヨアシの子ギデオンの劍に外ならず神ミ  
 デアンとすべての陣營之が手に付したまふなりと。五ギデオ  
 ン夢の説話とその解釋を聞しかば拜をなしてイスラエルの陣  
 所にかへりいひけるは起よエホバ。汝らの手にミデアンの陣を  
 わたしたまふと。六かくて三百人を三隊にわかち手に手に菰お  
 よび空瓶を取せその瓶のなかに燈火をおかしめ。七これにいひ

けるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らん  
 ときに爲すごとく汝らも爲すべし。八我およびわれとも在  
 るものすべて菰を吹は汝らもまたすべて陣營の四方にて菰を吹  
 き此エホバのためなりギデオンのためなりといへと。九而して  
 ギデオンおよび之ともなる百人中更の初に陣營の邊に至るに  
 をりしも番兵を更代たるときなりければ菰を吹き手に携へたる  
 瓶をうちくだけり。即ち三隊の兵隊菰を吹き瓶をうちくだき  
 左の手には燈火を執り右の手には菰をもちて之を吹きエホバの  
 劍ギデオンの劍なるぞと叫べり。かくておのおのその持場に  
 立ち陣營を取り圍みたれば敵軍みな走り叫びてにげゆけり。三  
 三百人のもの菰を吹くにあたりエホバ敵軍をしてみなたがひに  
 同士撃せしめたまひければ敵軍にげはしりてゼレラのベテシツ  
 ダ、アベルメホラの境およびタバテに至る。イスラエルの人々  
 すなはちナフタリ、アセルおよびマナセ中より集み來りてミデ  
 アン人を追撃り。四ギデオン使者をあまねくエフライムの山に  
 遣していはせけるは下りてミデアン人を攻めベタバラにいたる  
 渡口およびヨルダンを遮斷るべし。是においてエフライムの人  
 盡く集み來りてベタバラにいたる渡口およびヨルダンを取り。五  
 ミデアン人の君主オレブとゼエブの二人を俘へてオレブをは  
 オレブ砦の上に殺し。ゼエブをばゼエブの酒搾のほとりに殺しま  
 た。ミデアン人を追撃ちオレブとゼエブの首を携へてヨルダンの  
 彼方よりギデオンの許にいたる。

第八章一エフライムの人々ギデオンにむかひ汝ミディアン人と戦はんとて往る時われらを召ざりしが斯ることを我らになすは何故ぞといひていたく之を語りたりニギデオン之にいひけるは今吾が成るところは汝らのなせる所に比ぶべけんやエフライムの拾ひ得し遺餘の葡萄はアビエゼルの收穫し葡萄にも勝れるならずやニ神はミディアンの群伯オレブとゼエブを汝等の手に付したまへりわが成えたるころは汝らの成る所に比ぶべけんやとギデオン此の語をのべしかば彼らの憤解たり四ギデオン自己に從がへる三百人とともにヨルダンに至りて之を濟り疲れながらも仍追撃しけるが五遂にスコテの人々に言けるは願くは我にしたがへる民に食を與へよ彼等疲れをるに我ミディアンの王ゼバとザルムンナを進行なりと六スコテの群伯等いひけるはゼバとザルムンナの手すでに汝の手のうちに在るや我らなんぞ汝の軍勢に食を與ふべけんや七ギデオンいひけるは然らばエホバの吾が手にゼバをザルムンナを付したまふときに我野の荊と棘とをもて汝の肉を打つべしと八かくて其所よりペヌエルにのぼりおなじことを彼らにのべたるにペヌエルの人もスコテの人の答へしごとくに答へしかば九またペヌエルの人につげていひけるは我平康に歸るときに此の城樓を毀つべしと一〇僭ゼバとザルムンナはその軍勢おほよそ一萬五千人をひきみてカルコルに居る是皆東方の人の全軍の中の生残れるものなり戦死せし者は劍を抜ところのもの十二萬人ありき二ギデオンすなはちノバと

ヨグベバの東にて天幕にすめるものの路より上りて敵軍の慮りなく居るを撃り三ここにおいてゼバとザルムンナにげ走りたればギデオン之を追撃ちミディアンの二人の王ゼバとザルムンナを生捕て悉くその軍勢を敗れり三斯てヨアシの子ギデオン、ヘレシの阪よりして戦陣よりかへり四スコテの人の少壯者一人を執へて之に尋ねたれば即ちスコテの群伯およびその長老等七十七人をこれがために書き録せり五ギデオン、スコテの人の所に詣りていひけるは汝らが曾て我を罵りゼバとザルムンナの手すでに汝の手のうちにあるや我ら何ぞ汝の疲れたる人に食をあたふべけんやと言たりしそのゼバとザルムンナを見よと六すなはちその邑の長老等を執へ野の荊と棘を取り之をもちてスコテの人を懲し七またペヌエルの城樓を毀ちて邑の人を殺せり八かくてギデオン、ゼバとザルムンナにいひけるは汝らがタボルにて殺せしものは如何なるものなりしや答へていふ彼らは汝に似てみな王子の如くに見えたり九ギデオンいひけるは彼らは我が兄弟我が母の子なりエホバは活く汝らもし彼らを生し置たらば我汝らを殺すまじきをと一〇すなはちその長子エテルに起て彼らを殺せといひたりしが彼の少者は年尚わかかりしかば懼れて劍を抜きざりき三ここにおいてゼバとザルムンナイひけるは汝みづから起て我らを撃よ人の如何によりてその力量異なる者なりとギデオンすなはち起てゼバとザルムンナを殺しその駱駝の頸にかけたる半月の飾を取り三茲にイスラエルの

衆ギデオンにいひけるは汝ミデアンの手より我らを救ひたれば汝と汝の子及び汝の孫我らを治めよ。三ギデオンにいひけるは我汝らを治むることをせじまた我が子も汝らを治むべからずエホバ汝らを治めたまふべし。四ギデオンまた之にいひけるは我汝らにひとつの願ふべきことあり汝らのおの掠取の環を我にあたへよ。是は彼らイシマエル人なるをもて金の環を着けたるに由る。五衆答へけるは我ら悦んで之を與へんとて衣を布きおのおの掠取の環を其うちに投げいれたり。六ギデオンが求め得たる金の環の重量は金一千七百シケルなり。外に半月の飾および耳環とミデアンの王たちの着たる紫のころもおよび駱駝の頸にかけたる鏈などもありき。七ギデオン之をもて一箇のエポデを造り之をおのれの郷里オフラに藏む。イスラエルみなこれを慕ひてこれと淫をおこなふ。この物ギデオンと其家を陥るる害となりぬ。八ミデア人は是の如くイスラエルの子孫に攻ふせられてふたたびその頭を擡ることを得ざりき。かくて國はギデオンの世にある中四十年の間平穩にてありき。九ヨアシの子エルバル往ておのれの家に住り。三〇ギデオンは妻を多く有ちたれば其身より出たる子七十人ありき。三一シケムに居し。その妻またひとりの子を産たれば之をアビメレクと名けたり。三二ヨアシの子ギデオン妙齡に邁みて死にアビエゼル人のオフラに在るその父ヨアシの墓に葬られたり。三三ギデオンの死に及びてイスラエルの子孫復ひるがへりてバアルを慕ひて之と淫をおこ

なひバアルベリテをおのれの神と爲り。三四イスラエルの子孫その四周のもろもろの敵の手よりおのれを救ひ出したまひし。神エホバを記憶えす。三五またエルバルといふギデオンがイスラエルになせし諸の善行にしたがひて彼の家を厚く待ふことをせざりき。

第九章 エルバルの子アビメレク、シケムに往きその母の兄弟のもとに至りて彼らおよびすべて其母の父の家の一族に語りて云ひけるは。二ねがはくはシケムのすべての民の耳に斯く告よ。エルバルのすべての子七十人して汝らを治むると一人して汝らを治むると孰れか汝らのためによきや。また我は汝らの骨肉なるを覚えよ。三その母の兄弟アビメレクのことにつきて此等の言をことごとくシケムの人々の耳に語りしに。是はわれらの兄弟なりといひて心をアビメレクに傾む。け四バアルベリテの社より銀七十をとりて之に與ふ。アビメレクこれをもて遊蕩にして輕躁なる者等を備ひておのれに従はせ。五オフラに在る父の家に往きてエルバルの子なるその兄弟七十人を一つの石の上に殺せり。但しエルバルの季の子ヨタムは身を潜めしに由て遺されたり。六ここにおいてシケムのすべての民および三口の諸の人集り往てシケムの碑の旁なる橡樹の邊にてアビメレクを立て王となしけるが。七ヨタムにかくと告るものありければ。往てゲリジム山の巔に立ち聲を揚て號びかれらにいひけるは。シケムの民よ。我に聽よ。神また汝らに聽たまはん。八樹木出ておのれのうへ

に王を立んとし橄欖の樹に汝われらの王となれよといひけるに  
 九 橄欖の樹にいふ我いかで人の我に取て神と人とを崇むると  
 ころのそのわが油を棄てて往て樹木の上に戦ぐべけんやと一〇  
 樹木また無花果樹に汝來りて我らの王となれといひけるに二  
 無花果樹之にいひけらく我いかでわが甜美とわが善き果を棄て  
 往きて樹木の上に戦ぐべけんやと三 樹木また葡萄の樹に汝來  
 りて我らの王となれよといふに三 葡萄の樹之にいひけるは我  
 いかで神と人を悦ばしむるわが葡萄酒を棄て往て樹木の上に  
 戦ぐべけんやと四 ここにおいてすべての樹木荊に汝來りて我  
 らの王となれよといひければ五 荊樹木にいふ汝らまことに我  
 を立て汝らの王と爲さは來りて我が庇蔭に托れ然せずは荊より  
 火出てレバノンの香柏を焼き彈すべしと六 抑 汝らがアビメ  
 レクを立て王となせしは眞實と誠意をもて爲しことなるや汝等  
 はエルバアルと其家を善く待ひかれの手のなせし所に循ひて之  
 にむくいしや七 夫わが父は汝らのため戦ひ生命を惜まずして  
 汝らをミデアンの手より救ひ出したるに八 汝ら今日おこりて  
 わが父の家を攻めその子七十人を一つの石の上に殺しその侍妾  
 の子アビメレクは汝らの兄弟なるをもて之を立てシケムの民  
 の王となせり九 汝らが今日エルバアルとその家になせしこと  
 眞實と誠意をもてなせし者ならば汝らアビメレクのために悦べ  
 彼も汝らのために悦ぶべし一〇 若し然らずばアビメレクより火  
 いでてシケムの民と三口の家を燬つくさんまたシケムの民と三

口の家よりも火いでてアビメレクを燬つくすべしと二 かくて  
 ヨタム走り遁れてベエルに往きその兄弟アビメレクの面を避  
 て彼所に住めり三 アビメレク三年の間イスラエルを治めたり  
 しが三 神アビメレクとシケムの民のあひだに惡鬼をおくりた  
 まひたればシケムの民アビメレクを欺くにいたる四 是エルバ  
 アルの七十人が受たる殘忍と彼らの血のこれを殺せしその  
 兄弟アビメレクおよび彼の手に力をそへてその兄弟を殺さし  
 めたるシケムの人々に報い來るなり五 シケムの人伏兵を山の  
 巔に置いて彼を窺はしめ其途を経て傍を過る者を凡て褌しめたり  
 或人之をアビメレクに告ぐ六 ここにエベデの子ガアル其の  
 兄弟とともにシケムに越ゆきたりしかばシケムの民かれを恃  
 めり七 民田野に出て葡萄を收穫れこれを踐み絞りて祭禮をな  
 しその神の社に入り食ひかつ飲みてアビメレクを詛ふ八 エベ  
 デの子ガアルいひけるはアビメレクは如何なるものシケムは  
 如何なるものなればか我ら彼に従ふべき彼はエルバアルの子に  
 非ずやゼブルその輔佐なるにあらずやむしるシケムの父ハマル  
 の一族に事ふべし我らなんぞ彼に事ふべけんや九 嗚呼此の民  
 を吾が手に屬しむるものもがな然ば我アビメレクを除かんと  
 してガアル、アビメレクに汝の軍勢を益て出きたれよと言ひ三〇  
 邑の宰ゼブル、エベデの子ガアルの言をききて怒を發し三 一私  
 かに使者をアビメレクに遣りていひけるはエベデの子ガアル及  
 びその兄弟シケムに來り邑をさわがして汝に敵せしめんとす三

二然ば汝及び汝と共なる民夜の中に興て野に身を伏よ三而て朝に至り日の昇る時汝夙く興出て邑に攻かかれガアル及び之ともなる民出て汝に當らん汝機を見てこれに事をなすべし三  
 四アビメレクおよび之ともなるすべての民夜の中に興出て四隊に分れ身を伏てシケムを伺ふ三五エベデの子ガアル出て邑の門の口に立るにアビメレク及び之ともなる民その伏たるところより起りしかば三六ガアル民を見てゼブルにいひけるは視よ民山の峰々より下るとゼブル之に答へて汝山の影を見て人と做すのみといふ三七ガアルふたたび語りていひけるは視よ民地の高處より下りまた一隊は法術士の橡樹の途より來ると三八ゼブル之にいひけるは汝がかつてアビメレクは何者なればか我ら之に事ふべきといひしその汝の口今いづこに在るや是汝が侮りたる民にあらずや今乞ふ出て之と戦へよと三九ここににおいてガアル、シケム人を率ゐ往てアビメレクと戦ひしが四〇アビメレク之を追くづしたればガアル其まへより逃走れりかくて殺されて斃るるもの多くして邑の門の口までに及ぶ四一かくてアビメレクはアルマに居しがゼブルはガアルおよびその兄弟等を逐いだしてシケムに居ることを得ざらしむ四二あくる日民田畑に出しに人之をアビメレクに告げしかば四三アビメレクおのれの民を率ゐてこれを三隊に分ち野に埋伏して伺ふに民邑より出來りたればすなはち起りて之を撃り四四アビメレクおよび之とともに在る隊の者は襲ひゆきて邑の門の入口に立ち餘の二隊

は野に在るすべてのものをおそふて之を殺せり四五アビメレク其日終日邑を攻めつひに邑を取りてそのうちの民を殺し邑を破却ちて鹽を撒布ぬ四六シケムの櫓の人みな之を聞てペリテ神の廟の塔に入たりしが四七シケムの櫓の人のことごとく集れるよしアビメレクに聞えければ四八アビメレク己ともなる民をことごとく率ゐてザルモン山に上りアビメレク手に斧を取り木の枝を斫落し之をおのれの肩に載せ偕に居る民にむかひて汝ら吾が爲と見る急ぎてわがごとく爲せよといひしかば四九民もまた皆おのおのその枝を斫りおとしアビメレクに従ひて枝を塔に倚せかけ塔に火をかけて彼等を攻むここにおいてシケムの櫓の人もまた悉く死り男女およそ一千人なりき五〇茲にアビメレク、テベツに赴きテベツに對て陣を張て之を取しが五一邑のなかに一の堅固なる櫓ありてすべての男女および邑の民みな其所に遁れ往き後を鎖して櫓の頂に上りたれば五二アビメレクすなはち櫓のもとに押寄て之を攻め櫓の口に近きて火をもて之を焚んとせしに五三一人の婦アビメレクの頭に磨石の上層石を投げてその脳骨を碎けり五四アビメレクおのれの武器を執る少者を急ぎ召て之にいひけるは汝の劍を抜て我を殺せおそらくは人吾をさして婦に殺されたりといはんと其少者之を刺し通したればすなはち死り五五イスラエルの人々はアビメレクの死たるを見ておのおのおのれの處に歸り去りぬ五六神はアビメレクがその七十人の兄弟を殺しておのれの父になしたる惡に斯く

報いたまへり五七 またシケムの民のすべての惡き事をも神は彼等の頭に報いたまへりすなはちエルバアルの子ヨタムの詛彼らの上に及べるなり

第一〇章一アヒメレクの後イツサカルの人にてドドの子なるプワの子トラ起りてイスラエルを救ふ彼エフライムの山のシヤミルに住み二十三年の間イスラエルを審判しがつひに死てシヤミルに葬らる彼の後にギレアデ人ヤイル起りて二十二年の間イスラエルを審判たり四彼に子三十人ありて三十の驢馬に乗る彼等三十の邑を有りギレアデの地において今日までヤイルの村となふるものすなはち是なり五ヤイル死てカモンに葬らる六イスラエルの子孫ふたたびエホバの目のまへに惡を爲しバアルとアシタロテ及びスリヤの神シドンの神モアブの神アンモンの子孫の神ペリシテ人の神に事へエホバを棄て之に事へざりき七エホバ烈しくイスラエルを怒りて之をペリシテ人及びアンモンの子孫の手に賣付したまへり八其年に彼らイスラエルの子孫を虐げ難せりヨルダンの彼方においてギレアデにあるところのアモリ人の地に居るイスラエルの子孫十八年の間斯せられたり九アンモンの子孫またユダとベニヤミンとエフライムの族とを攻んとてヨルダンを渡りしかばイスラエル太く苦めり一〇ここに於いてイスラエルの子孫エホバに呼びていひけるは我らおのれの神を棄てバアルに事へて汝に罪を犯したりと一エホバ、イスラエルの子孫にいひたまひけるは我かつてエジプト人アモ

リ人アンモンの子孫ペリシテ人より汝らを救ひ出せしにあらずや二又シドン人アマレク人及びマオン人の汝らを困しめしと三汝ら我に呼びしかば我汝らを彼らの手より救ひ出せり四然るに汝ら我を棄て他の神に事ふれば我かさねて汝らを救はざるべし四汝らが擇める神々に往て呼れ汝らの艱難のときに之をして汝らを救はしめよ五イスラエルの子孫エホバに言けるは我ら罪を犯せりすべて汝の目に善と見るところを我らになしたまへねがはくは唯今日我らを救ひたまへと六而して民おのれの中より異なる神々を取除きてエホバに事へたりエホバの心イスラエルの艱難を見るに忍びずなりぬ七茲にアンモンの子孫集てギレアデに陣を取りしがイスラエルの子孫は聚りてミツパに陣を取り八時に民ギレアデの群伯たがひにいひけるは誰かアンモンの子孫に打ちむかひて戰を始むべき人ぞ其人をギレアデのすべての民の首となすべしと

第一章一ギレアデ人エフタはたけき勇士にして妓婦の子なりギレアデ、エフタをうましめしなり二ギレアデの妻子等をうみしが妻の子等成長におよびてエフタをおひだしてこれにいひけるは汝は他の婦の子なればわれらが父の家を嗣べきにあらずと三エフタ其の兄弟の許より逃ざりてトブの地に住けるに遊蕩者エフタのもとに集ひ來りて之とともに出ることをなせり四程經てのちアンモンの子孫イスラエルとたたかふに至りしが五アンモンの子孫のイスラエルとたたかへるときにギレアデの

長老等ゆきてエフタをトブの地より携來らんとし六 エフタにいひけるは汝來りて吾らの大將となれ我らアンモンの子孫とたたかはん七 エフタ、ギレアデの長老等にいひけるは汝ら是我を惡みてわが父の家より逐いだしたるにあらざるやしかるに今汝らが艱める時に至りて何ぞ我に來るや八 ギレアデの長老等エフタにこたへけるは其がために我ら今汝にかへる汝われらともゆきてアンモンの子孫とたたかばすべて我等ギレアデにすめるもの首領となすべしと九 エフタ、ギレアデの長老等にいひけるは汝らもし我をたづさへかへりてアンモンの子孫とたたかはしめんしエホバ之を我に付したまはば我は汝らの首となるべし一〇 ギレアデの長老等エフタにいひけるはエホバ汝と我との間の證者たり我ら誓つて汝の言のごとくになすべし一一是に於てエフタ、ギレアデの長老等とともに往くに民之を立ておのれの首領となし大將となせりエフタ 即ちミツパにおいてエホバのまへにこの言をことごとく陳たり二三 かくてエフタ、アンモンの子孫の王に使者をつかはしていひけるは汝と我の間に何事ありてか汝われに攻めきたりてわが地に戰はんとする三 アンモンの子孫の王エフタの使者に答へけるはむかしイスラエル、エジプトより上りきたりし時にアルノンよりヤボクにいたりヨルダンに至るまで吾が土地を奪ひしが故なり然ば今穩便に之を復すべし一四 エフタまた使者をアンモンの子孫の王に遣りて之にいはせけるは一五 エフタ斯いへりイスラエルはモアブの

地を取らずまたアンモンの子孫の地をも取ざりしなり一六 夫イスラエルはエジプトより上りきたれる時に曠野を経て紅海に到りカデシに來れり一七 而してイスラエル使者をエドムの王に遣して言けるはねがはくは我をして汝の土地を經過しめよと然るにエドムの王之をうけがはずまたおなじく人をモアブの王に遣したれども是もつべなはざりしかばイスラエルはカデシに留まりしが一八 遂にイスラエル曠野を経てエドムの地およびモアブの地を繞りモアブの地の東の方に出てアルノンの彼方に陣を取り然どモアブの界には入らざりきアルノンはモアブの界なればなり一九 かくてイスラエル、ヘシボンに王たりしアモリ人の王シボンに使者を遣せりすなはちイスラエル之にいひけらくねがはくは我らをして汝の土地を經過てわがところをいたらしめよと二〇 然るにシボン、イスラエルを信ぜずしてその界をとほらしめずかへつてそのすべての民を集めてヤハツに陣しイスラエルとたかひしが二一 イスラエルの神アホバ、シボンとそのすべての民をイスラエルの手に付したまひたればイスラエル之を擊敗りてその土地にすめるアモリ人の地を悉く手に入れ二二 アルノンよりヤボクに至るまでまた曠野よりヨルダンに至るまですべてアモリ人の土地を手に入り二三 斯のごとくイスラエルの神アホバは其の民イスラエルのまへよりアモリ人を逐りしぞけたまひしに汝なほ之を取んとする乎一四 汝は汝の神ケモシが汝に取しむるものを取ざらんやわれらは我らの神アホバが我らに取しむ

る物を取ん二五 汝は誠にモアブの王チツポルの子バラクにまさ  
れる處ありとするかバラク曾てイスラエルとあらそひしことあ  
りや曾て之とたたかひしことありや二六 イスラエルがヘシボン  
とその村里アロエルとその村里およびアルノンの岸に沿ひたる  
すべての邑々に住ること三百年なりしに汝などてかその間に之  
を回復さざりしや二七 我は汝に罪を犯せしことなきに汝はわれ  
とたたかひて我に害をくはへんとす願くは審判をなしたまふア  
ホバ今日イスラエルの子孫とアンモンの子孫との間を鞫きたま  
へと二八しかれどもアンモンの子孫の王はエフタのいひつかは  
せる言を聴いれざりき二九 ここにエホバの靈エフタに臨みしか  
ばエフタすなはちギレアデおよびマナセを経過りギレアデのミ  
ヅパにいたりギレアデのミヅパよりすみてアンモンの子孫に  
向ふ三〇エフタ、エホバに誓願を立ていひけるは汝誠にアンモ  
ンの子孫をわが手に付したまはば三三 我がアンモンの子孫の所  
より安然かに歸らんときに我家の戸より出きたりて我を迎ふる  
もの必ずエホバの所有となるべし我之を燔祭となしてささげん  
と三二 エフタすなはちアンモンの子孫の所に進みゆきて之と戦  
ひしにエホバかれらをその手に付したまひしかば三三 アロエル  
よりミンニテにまで至りこれが二十の邑を打敗りてアベルケラ  
ミムにいたり甚だ多人をころせりかくアンモンの子孫はイス  
ラエルの子孫に攻伏られたり三四 かくてエフタ、ミヅパに來りて  
おのが家にいたるに其女鼓を執り舞ひ踊りて之を出で迎ふ是

彼が獨子にて其のほかには男子もなくまた女子も有ざりき三五  
エフタ之を見てその衣を裂ていひけるはああ吾が女よ汝實に  
我を傷しむ汝は我を惱すものなり其は我エホバにむかひて口を  
開きしによりて改むることあたはざればなり三六 女之にいひけ  
るはわが父よ汝エホバにむかひて口をひらきたれば汝の口よ  
り言出せしごとく我になせよ其はエホバ汝のために汝の敵な  
るアンモンの子孫に仇を復したまひたればなり三七 女またその  
父にいひけるはねがはくは此事をわれに允せずなはち二月の  
間我をゆるし我をしてわが友等とともに往て山にくだりてわ  
が處女たることを歎かしめよと三八 エフタすなはち往けといひ  
て之を二月のあひだ出し遣ぬ女その友等とともに往き山の上  
ておのれの處女たるを歎きしが三九 二月満てその父に歸り來り  
たれば父その誓ひし誓願のごとくに之に行へり女は終に男を  
知ことなかりき四〇 是よりして年々にイスラエルの女子等往て  
年に四日ほどギレアデ人エフタの女のために哀哭ことをなす是  
イスラエルの規矩となれり

第二章一エフライムの人々つどひて北にゆきエフタにいひけ  
るは汝何故に往きてアンモンの子孫と戦ひながらわれらをま  
ねきて汝とともに行せざりしや我ら火をもて汝の家を汝とも  
に焚くべしと二 エフタ之にいひけるは我とわが民の曾てアンモ  
ンの子孫と大に争ひしときに我汝らをよびしに汝らかれらの  
手より我を救ふことをせざりき三 我汝らが我を救はざるを見た

ればわが命をかけてアンモンの子孫の所に攻めゆしにエホバかれらを我が手に付したまへり然ば汝らなんぞ今日我が許に上り來りて我とたたかはんとするやと四エフタここにおいてギレアドの人をことごとくつどへてエフライムとたたかひしがギレアドの人々エフライムを撃破れり是はエフライム汝らギレアド人はエフライムの逃亡者にしてエフライムとマナセの中をるなりと言しに由る五而してギレアド人エフライムにおもむくところのヨルダンの津をとりきりしがエフライム人の逃れ來る者ありて我を渡らせよといへばギレアドの人之に汝はエフライム人なるかと問ひ彼もし然らずと言ときは六また之に請ふシボレテといへといふに彼その音を正しくいひ得ずしてセボレテと言ばすなはち之を引捕へてヨルダンの津に屠せりその時にエフライム人のたふれし者四萬二千なりき七エフタ六年のあひだイスラエルを審きたりギレアド人エフタつひに死てギレアドのある邑に葬むらるハ彼の後にベテレヘムのイブザン、イスラエルを審きたり九彼に三十人の男子ありまた三十人の女子ありしがこれをば外に嫁がしめてその子息等のために三十人の女を外より娶れり彼七年のあひだイスラエルを審きたり一〇イブザンつひに死てベテレヘムに葬むらる二彼の後にゼブルン人エロン、イスラエルを審きたりゼブルン人エロン十年のあひだイスラエルを審きたり二三ゼブルン人エロンつひに死てゼブルンの地のアヤロンに葬むらる三彼の後にヒラトン人ヒレルの子アブド

ン、イスラエルを審きたり一四彼に四十人の男子および三十人の孫ありて七十の驢馬に乗る彼八年のあひだイスラエルを審けり一五ヒラトン人ヒレルの子アブドンつひに死てエフライムの地のヒラトンに葬むらる是はアマレク人の山にあり  
 第三章一イスラエルの子孫またエホバのまへにて悪を行ひしかばエホバこれを四十年の間ペリシテ人の手にわたしたまへり二ここにダン人の族に名をマノアとよべるゾラ人あり其の妻は石婦にして子を生みしことなし三エホバの使その女に現れて之にいひけるは汝は石婦にして子を生しことあらず然ど汝孕みて子をうまん四されば汝つつしみて葡萄酒および濃き酒を飲むことなかれまたすべて穢たるものを食ふなかれ五視よ汝孕みて子を産ん其の頭には剃刀をあつべからずその兒は胎を出るよりして神のナザレ人神に身を獻げし者六たるべし彼ペリシテ人の手よりイスラエルを拯ひ始めんと六その婦人來りて夫に告て曰けるは神の人我にのぞめりその容貌は神の使の容貌のごとくにして甚おそろしかりしが我其のいづれより來れるやを問ず彼また其の名を我に告ざりき七彼我にいひけるは視よ汝孕みて子を産まん然ば葡萄酒および濃き酒を飲むなかれまたすべてけがれたるものを食ふなかれその兒は胎を出るより其の死る日まで神のナザレ人たるべしとハマノア、エホバにこひ求めていひけるはああわが主よ汝がさきに遣はしたまひし神の人をふたたび我らにのぞませ之をして我らがその産るる兒になすべき事を

教へしめたまへ九神マノアの聲をききいれたまひて神の使者  
 婦人の田野に坐しをる時に復これにのぞめり時に夫マノアは共  
 にをらざりき〇是において婦いそぎ走りて夫に告て之にいひ  
 けるは先頃我にのぞみし人また我に現はれたりとマノアす  
 なはち起て妻のあとに付て行き其人のもとに至りて之に汝はか  
 つて此婦に語言し人なるかといふに然りとこたふニマノアい  
 ひけるは汝の言のごとく成ん時は其兒の養育方および之になす  
 べき事は如何ニエホバの使者マノアにいひけるはわがさきに  
 婦に言しところのごともは婦之をつつしむべきなり一四すな  
 はち葡萄樹よりいつる者は凡て食ふべからず葡萄酒と濃き酒を  
 飲すまたすべ穢たるものを食ふべからずすべてわが彼に命じ  
 たることどもを彼守るべきなり一五マノア、エホバの使者にいひ  
 けるは請我らをして汝を款留しめ汝のまへに山羊羔を備へしめ  
 よ一六エホバの使者マノアにいひける汝我を款留も我は汝の  
 食物をくらはじまた汝燔祭をそなへんとならばエホバにこれ  
 をそなふべしとマノアは彼がエホバの使者なるを知ざりしなり  
 一七マノア、エホバの使者にいひけるは汝の名はなにぞ汝の言の  
 效驗あらんときは我ら汝を崇ん一八エホバの使者ににいひける  
 は我が名は不思議なり汝何故に之をたづぬるやと一九マノア  
 山羊羔と素祭物とをとり磐のうへにて之をエホバにささぐ使者  
 すなはち不思議なる事をなせりマノアとその妻之を視る二〇す  
 なはち火燄壇より天にあがれるときエホバの使者壇の火燄のう

ちにありて昇れりマノアと其の妻これを視をりて地にひれふせ  
 りニエホバの使者そののち重ねてマノアと其の妻に現はれざ  
 りきマノアつひに彼がエホバの使者たりしを曉れり三茲にマ  
 ノアその妻にむかひ我ら神を視たれば必ず死ぬるならんといふ  
 に三其の妻之にいひけるはエホバもし我らを殺さんとおもひ  
 たまはばわれらの手より燔祭及び素祭をつけたまはざりしなら  
 んまたこれらの諸のことを我らに示すことをなしこたひのごと  
 く我らに斯ることを告たまはざりしなるべしと四かくて婦子  
 を産てその名をサムソンと呼べりその子育ち行くエホバこれを  
 恵みたまふ三五エホバの靈ゾラとエシタオルのあひだなるマハ  
 ネダンにて始めて感動す

第一四章一サムソン、テムナテに下り、ペリシテ人の女にてテム  
 ナテに住る一人の婦を見二歸り上りておのが父母に語ていひけ  
 るは我ペリシテ人の女にてテムナテに住るひとりの婦を見たり  
 されば今之をめとりてわが妻とせよと三その父母之にいひける  
 は汝ゆきて割禮を受けざるペリシテ人のうちより妻を迎んとす  
 るは汝が兄弟等の女のうちもしくはわがすべての民のうちに  
 婦女無が故なるかとしかるにサムソン父にむかひ彼婦わがこ  
 ころに適へば之をわがために娶れと言り四その父母はこの事の  
 エホバより出しなるを知ざりきサムソンはペリシテ人を攻んと  
 鬨をうかがひしなりそは其のころペリシテ人イスラエルを轄め  
 居たればなり五サムソン父母とともにテムナテに下りてテムナ

テの葡萄園ぶどうばたけにいたるに稚わかき獅子しし咆哮ほえりて彼かれに向むかひしが六エホバの靈みたま彼かれにのぞみたれば山羊こやぎを裂さくがごとくに之これを裂さきたりしが手てには何なにの武器えものも持もたざりきされどサムソンはその爲なせしことを父ちちにも母ははにも告つげずしてありぬセサムソンつひに下くだりて婦せんとうちかたらひしが婦せんその心こころにかなへりハかくて日ひを経て後のちサムソンかれを娶めとらんとて立たちかへりしが身みを轉めくして彼かれの獅子ししの屍なほを見るに獅子ししの體からだに蜂はちの群むらと蜜みつとありければ九くすなはちその蜜みつを手てとりて歩あゆみつつ食くらひ父母ちちははの許もとにいたりて之これを與あたへけるに彼かれ之これを食くらへりされど獅子ししの體からだよりその蜜みつを取とり來これることをば彼かれらにかたらざりき一〇斯かくて其そのの父ちち下くだりて婦せんのもとに至いたりしかばサムソン少年わかこの習しな例なまじにしたがひてそこに饗なご宴まひをまうけたるに二サムソンを見みて三十人にんの者ものをつれ來きたりて之これが伴とも侶りとならしむ三サムソンかれらにいひけるは我われ汝なんぢらにひとつの隱なぞ語ごをかけん汝なんぢら七日なぬかの筵ふるまひ宴まひの内うちに之これを解ときてあきらかに之これを我われに告つげなば我われ汝なんぢらに裏はた衣ぎ三十いそと衣ぎ三十いそ襲おそをあたふべし三然されどもし之これをわれに告つげずば汝なんぢら我われに裏はた衣ぎ三十いそと衣ぎ三十いそ襲おそを與あたふべしと彼かれ等ら之これにいひけるは汝なんぢの隱なぞ語ごをかけて我われらに聽きかしめよ四サムソンこれにいひけるは食くらふ者ものより食物くもの出いで強つよき者ものより甘あまき物もの出いでたりと彼かれら三日みつかの中ちゆうに之これを解ときことあたはざりしかば五第七日ななにいたりてサムソンの妻つまにいひけるは汝なんぢの夫おとこを説とすすめて隱なぞ語ごを我われらに明あかしめよ然しかせざば火ひをもて汝なんぢと汝なんぢの父ちちの家いへを焚やかん汝なんぢらはわれらの物ものをとらんとてわれらを招まねけるなるか然しかるにあらずや

と一六是こゝにおいてサムソンの妻つまサムソンのまへに泣なきていひけるは汝なんぢはわれを惡にくむ而のみ巴あわれを愛あいせざるなり汝なんぢわが民たみの子孫ひとびとに隱なぞ語ごをかけて之これをわれに説とあかさすとサムソン之これにいふ我われこれをわが父ちちや母ははにも説とあかさざればいかで汝なんぢに説とあかさすべけんやと一七婦せん七日なぬかの筵ふるまひ宴まひのあひだ彼かれのまへに泣なき居いりしが第七日ななに至いたりてサムソンつひに之これを彼かれに説とあかせり其そのは太いたく強しひたればなり婦せんすなはち隱なぞ語ごをおのが民たみの子孫ひとびとに明あかせり一八是こゝにおいて第七日ななに及びて日ひの没いるまへに邑まちの人々ひとびとサムソンにいひけるは何いものか蜜みつよりあまからん何いものか獅子ししより強つよからんとサムソン之これにいひけるは汝なんぢらわが牝めう犢しをもて耕たがさざりしならばわが隱なぞ語ごを解とき得えざるなりと一九茲こゝにエホバの靈みたまサムソンに臨のぞみしかばサムソン、アシケロンに下くだりてかしこの者もの三十人にんを殺ころしその物ものを奪うばひ彼の隱なぞ語ごを解ときし者もの等らにその衣服きものを與あたへはげしく怒いかりて其その父ちちの家いへにかへり上あれり二〇サムソンの妻つまはサムソンの友ともとなり居あり居ありたるその伴とも侶りの妻つまとなりぬ

第一五章一日ひを経てのち麥むぎ秋あきの時にサムソン山羊こやぎをたづさへて妻つまのもとを訪とうていひけるは我われ室むろに入いりてわが妻つまに會あはんと然しかるに妻つまの父ちち其そのの入いることをゆるさず二其その父ちちすなはちいひけるはわれまことに汝なんぢは彼の婦せんを嫌きらひたりと意おそひしがゆゑに彼かれを汝なんぢの伴とも侶りたりし者に與あたへたり彼かれが妹いもは彼かれよりも善よきにあらずやねがはくは彼かれに代かへて之これを汝なんぢのものとせよ三サムソン彼かれらにいひけるは今回このたびはわれペリシテ人に害がいを加くはるとも彼かれらに對たいして罪つみなかるべしと

四サムソンすなはち往て山犬三百をとらへ火炬をとり尾と尾をあはせてその二つの尾の間に一つの火炬を結びつけ五火炬に火をつけてペリシテ人のいまだ刈ざる麥のなかにこれを放ち入れその束ね積たるものといまだ刈ざるものを焚き橄欖の園にまで及ぼせり六ペリシテ人いひけるは是は誰の行爲なるやこたへて言ふテムナテ人の婿サムソンなりそは彼サムソンの妻をとりに其伴侶なりし者に與へたればなりとここにおいてペリシテ人上りきたりて彼の婦とその父とを火にて焼きうしなへり七サムソンかれらに言ふ汝ら斯おこなへば我汝らに仇をむくはでは止じと八すなはち脛に腿に彼らを撃て大いに之を殺せりかくてサムソンは下りてエタムの巖間に居る九ここにおいてペリシテ人上り來りてユダに陣を取りレヒに布き備へたれば○ユダの人々いひけるは汝ら何の故にわれらに攻めのぼりたるやとかれらこたへけるはサムソンをしばらくて彼がわれらに爲しごとくかれに爲んとてのぼれるなりと一是をもてユダの人三千人エタムの巖間にくだりてサムソンにいふ汝ペリシテ人はわれらを轄るものなるを知らざるや汝などてかわれらに斯る事をなせしやサムソンかれらにいひけるは我は彼らが我に爲しごとく彼らに爲しなりと二かれらまたサムソンにいひけるは我らは汝をしばらくてペリシテ人の手にわたさんとて下りきたれりサムソンかれらにいひけるは汝らの自われを害すまじきことを我に誓へ二三彼ら之にかたりていふいなわれらはただ汝を縛りいましめ

てペリシテ人の手にわたさんのみわれらは必ず汝を殺さざるべしとすなはち二條の新しき索をもてかれをいまして巖より之を携かへれり四サムソン、レヒにいたれるときペリシテ人聲を揚てかれに近づきしが時しもエホバの靈彼にのぞみたればその腕にかかれる索は火に焚たる麻のごとくになりて手のいましめ解はなれたり五サムソンすなはち驢馬のあたらしき腮骨ひとつを見出し手をのべて之を取り其をもて一千人を殺し一六而して言ふ驢馬の腮骨をもて山をきつき山をつくる驢馬の腮骨をもて我一千人を撃殺せりと一七かく言終りてその手より腮骨をうちすて其處をフマテレヒと名けたり一八時に彼渴をおぼゆること甚だしかりしかばエホバによははりていふ汝のしもべの手をもて汝この大なる拯をほどこしたまへるにわれ今渴きて死に割禮を受けざるもの手におちいらんとすと一九ここにおいて神レヒに在るくぼめる所を裂きたまひしかば水そこより流れいでしがサムソン之を飲たれば精神舊に返りてふたたび爽になりぬ故に其名をエンハツコレ(呼はれるもの泉)と呼ぶ是今日にいたるまでレヒに在り○サムソンはペリシテ人の治世の時に二十年イスラエルをさばけり

第一六章一サムソン、ガザに往きかしこにて一人の妓を見てその處に入しにサムソンここに來れりとガザ人につぐるものありければすなはち之を取り圍みよもすがら邑の門に埋伏し詰朝におよび夜の明たる時に之をころすべしといひてよもすがら

ら静まりかへりて居る。サムソン夜半までいね夜半にいたりて興き邑の門の扉とふたつの柱に手をかけて健もろとも之をひきぬき肩に載てヘブロンに向ひなる山の巔に負のぼれり。四このちサムソン、ソレクの谷に居る名はデリラと言ふ婦人を愛す。五ペリシテ人の群伯その婦のもとに上り来て之にいひけるは、汝サムソンを説す。すめてその大いなる力は何に在るか。またわれら如何にせば之に勝て。之を縛りくるしむるを得べきか。を見出せ。然すればわれらおのおの銀千百枚づつをなんぢに與ふべし。六ここにおいてデリラ、サムソンにいひけるは、汝の大なる力は何にあるか。また如何せば汝を縛りて苦むることを得るや。請ふ之をわれにつげよ。七サムソン之にいひけるは、人もし乾きしことなき七條の新しい繩をもてわれを縛るときは、われ弱くなりて別の人のごとくならんと。八ここに於てペリシテ人の群伯乾きしことなき七條の新しい繩を婦にもち來りければ、婦之を以てサムソンをしばりしが、九かねて室のうちに入し。のび居て己ともにもありたれば、斯してサムソンにむかひサムソンよ、ペリシテ人、汝に及ぶと言にサムソンす。なはちその索を絶り。あたかも麻絲の火にあひて斷るるがごとし。斯其の力の原由知れざりき。〇デリラ、サムソンにいひけるは、視よ、汝われを欺きてわれに謊を告たり。請ふ何をもてせば、汝を縛ることをうるや。今我に告よ。一彼之にいひけるは、もし人用ひたることなき新しい索をもてわれを縛り、いましめなば、われ弱くなりて別の人のごとくならんと。二是をもてデ

リラあたらしき索をとり、其をもて彼を縛りしかして、彼にいふ。サムソンよ、ペリシテ人、汝におよぶと時に室のうちに入し。のび居たりしが、サムソン、絲の如くにその索を腕より絶おとせり。三デリラ、サムソンにいひけるに、今までは、汝われを欺きて我に謊をつげたるが何をもてせば、汝をしることをうるや。われに告よ。と彼之にいひけるは、汝もしわが髪、毛七縷を機、の緯線とともに織ばす。なはち可しと。四婦す。なはち釘をもて之をとめおきて、彼にいひけるは、サムソンよ、ペリシテ人、汝におよぶとサムソンす。なはちその寢をさまし、織機の釘と緯線とを曳、拔り。五婦、ここにおいてサムソンにいひけるは、汝の心われに居ざるに、汝いかでわれを愛す。といふや。汝すでに三次われをあざむきて、汝が大なる力の何にあるかをわれに告すと。六日々、その言をもて之にせまり。うながして、彼の心死ぬるばかりに、苦ませたれば、七彼つひにその心をことごとく、打明して、之にいひけるは、わが頭には、いまだかつて、剃刀を當し、ことあらず。そは、われ母の胎を出るよりして、神のナザレ人たれば、なりもし、われ髪をそり、おとされなば、わが力、われを、はなれ、われは、弱くなりて、別の人のごとくならんと。八デリラ、サムソンが、ことごとく、其の、このころを、明したるを見、人をつかはして、ペリシテ人の群伯を、召て、いひけるは、サムソン、ことごとく、その心をわれに、明したれば、今ひとたび、上り來るべし。と、ここにおいて、ペリシテ人の群伯、かの銀を、携へて、婦のもとに、いたる。九婦、おのが膝のうへに、サムソンを、ねむらせ、人をよびて、その頭髪七縷を、きり

おとさしめ之を苦めはじめたるにその力すでにうせさりてあり  
 二〇婦ここに於いてサムソンよペリシテ人汝におよぶといひけ  
 れは彼睡眠をさましていひけるはわれ毎のごとく出て身を振は  
 さんと彼はエホバのおのれをはなれたまひしを覺らざりき二  
 ペリシテ人すなはち彼を執へ眼を抉りて之をガザにひき下り銅  
 の鏈をもて之を繋げりかくてサムソンは囚獄のうちに磨を挽居  
 たりしが三その髪の毛剃りおとされてのち復長はじめたり三  
 茲にペリシテ人の群伯共にあつまりてその神ダゴンに大なる  
 祭物をささげて祝をなさんとしすなはち言ふわれらの神はわ  
 れらの敵サムソンをわれらの手に付したりと四民サムソンを  
 見ておのれの神をほめたたへて言ふわれらの神はわれらの敵た  
 る者われらの地を荒せしものわれらを數多殺せしものをわれら  
 の手に付したりと五その心に喜びていひけるはサムソンを召  
 てわれらのために戯技をなさしめよとて囚獄よりサムソンを召  
 いだせしかばサムソン之がために戯技をなせり彼等サムソンを  
 柱の間に立しめしに二六サムソンおのが手をひきををる少者に  
 ひけるはわれをばなして此家の倚て立ところの柱をさぐりて之  
 に倚しめよと三七その家には男女充ちペリシテ人の群伯もま  
 たみな其處に居る又屋蓋のうへには三千ばかりの男女をりてサ  
 ムソンの戯技をなすを觀てありき三八時にサムソン、エホバに呼  
 はりいひけるはああ主エホバよねがはくは我を記念えたまへ  
 嗚呼神よ願くは唯今一度われを強くしてわがふたつの眼のひと

つのためにだにもペリシテ人に仇をむくいしめたまへと二九サ  
 ムソンすなはちその家の倚てたつところの兩箇の中柱のひと  
 つを右の手ひとつを左の手にかかへて身をこれによせたりしが  
 三〇サムソン我はペリシテ人とともに死なるといひて力をきは  
 めて身をかがめたれば家はそのなかに居る群伯とすべての民の  
 うへに倒れたりかくサムソンが死るときに殺せしものは生ける  
 ときに殺せし者よりもおほかりき三二このちサムソンの兄弟  
 およびその父の家族ことごとくだりて之を取り携へのぼりてゾ  
 ラとエスタオルのあひだなる其の父マノアの墓にはうむれりサ  
 ムソンがイスラエルをさばきしは二十年なりき  
 第一七章ここにエフライムの山の人にて名をミカとよべるも  
 のありしが三その母に言けるは汝かつてその千百枚の銀を取れ  
 しことを吾が聞ところにて詛ひて語りしが視よその銀はわが手  
 に在り我之を取るなりと母すなはちわが子よねがはくはエホバ  
 汝に祝福をたまへと言ひ三彼千百枚の銀をその母にかへせしか  
 ば母いひけらくわれわが子のためにひとつの像を雕みひとつの  
 像を鑄んためにその銀をわが手よりエホバに納む然ばわれ今之  
 を汝にかへすべしと四ミカその銀を母にかへせしかば母その銀  
 二百枚をとりて之を鑄物師にあたへてひとつの像をきざませひ  
 とつこの像を鑄させたり其像はミカの家内に在り五このミカといふ  
 人神の殿をもちをりエポデおよびテラピムを造りひとつの子を  
 立ておのが祭司となせり六此ときにはイスラエルに王なかりけ

れば人々おのれの目に是とみゆることをおこなへり七ここにひ  
 とりの少者ありてベテレヘムユダに於てユダの族の中をる彼  
 はレビ人にしてかしこに寓居るなり八この人居べきところをた  
 づねてその邑ベテレヘムユダを去しが遂に旅してエフライムの  
 山にゆきてミカの家に行たりしに九ミカ之にいひけるは汝いつ  
 こよ來れるやと彼之にいふ我はベテレヘムユダのレビ人なるが  
 居べきところをたづねに往くものなり一〇ミカ之に言けるは汝  
 われと偕に居りわがために父とも祭司ともなれよ然ばわれ年に  
 銀十枚および衣服食物を汝にあたへんとレビ人すなはち入し  
 が二レビ人つひにその人と偕に居んことを肯ふ是においてそ  
 の少者はかれの子の一人のごとくなりぬ三ミカ、レビ人なるこ  
 の少者をたてて祭司となしたればすなはちミカの家に居る三  
 ミカここにおいて言ふ今われ知るエホバわれに恩恵をたまはん  
 そはこのレビ人われの祭司となればなり

第一八章 當時イスラエルには王なかりしがダン人の支派其頃  
 住むべき地を求めたり是は彼らイスラエルの支派の中において  
 其日まで未だ産業の地を得ざりしが故なりニダンの子孫すなは  
 ちゾラとエシタオルよりして自己の族の勇者五人を遣はしその  
 境を出て土地を窺ひ探らしむ即ち彼等に言ふ往て土地を探れと  
 彼等エフライムの山にいたりミカの家につきて其處に宿れり三  
 かれらミカの家の傍にある時レビ人なる少者の聲を聞認たれば  
 身をめぐらして其處にいりて之に言ふ誰が汝を此に携きたりし

や汝此處にて何をなすや此に何の用あるや四其人かれらに言  
 けるはミカ斯々我を待ひ我を雇ひて我その祭司となれりと五  
 彼等これに言ふ請ふ神に問ひ我等が往ところの途に利達あるや  
 否を我等にしらしめよ六その祭司かれらに言けるは安んじて往  
 よ汝らが往ところの途はエホバの前にあるなりと七是に於て五  
 人の者往てライシに至り其處に住る人民を視るに顧慮なく住  
 ひをり其安穩にして安固なることシドン人のことし此國には  
 政權を握りて人を煩はす者絶てあらず其シドン人と隔たること  
 遠くまた他の人民と交ることなし八斯て彼等ゾラとエシタオル  
 に返りてその兄弟等にいたるに兄弟等如何なりしやと彼等に  
 問ければ九答て言ふ起よ彼等の所に攻のほらん我等その地を見  
 るに甚だ善し汝等は安んじをるなり進みいたりてその地を取る  
 ことを怠るなかれ一〇汝等往ば安固なる人民の所に至らんその  
 地は堅横ともに廣し神これを汝らの手に與へたまふなり此處  
 には世にある物一箇も缺ることあらず二是に於てダン人の族  
 の者六百人武器を帶てゾラとエシタオルより出ゆき三上りて  
 ユダのキリヤテヤリムに陣を張り是をもてその處をマハネダン  
 と名けしがその名今日に存る是はキリヤテヤリムの後にあり三  
 彼等其處よりエフライム山に進みミカの家に至りけるに四夫  
 のライシの國を窺ひに往たりし五人の者その兄弟等に告て言  
 けるは是等の家にはエポデ、テラピムおよび彫める像と鑄たる  
 像あるを汝等知や然ば汝ら今その爲べきことを考へよと五乃

ち其方に身をめぐらして夫のレビ人の少者の家なるミカの家に  
 至りてその安否を問けるが二六 武器を帯たる六百人のダンの  
 子孫は門の入口に立り一七 夫の土地を窺ひに往たりし五人の者  
 上りて其處にいりその彫める像とエポデとテラピムおよび鑄た  
 る像を取けるが祭司は武器を帯たる六百人の者ととも門の入  
 口に立ぬたり一八 此人々ミカの家にいりて其彫める像とエポデ  
 とテラピムと鑄たる像とを取しかば祭司かれらに汝ら何をなす  
 やと言ふに一九 彼等これに言けるは汝黙せよ汝手を口にあてて  
 我らとともに來り我らの父とも祭司ともなれよかし一人の家の  
 祭司たるとイスラエルの一の支派一の族の祭司たるとは何か  
 好や二〇 祭司すなはち心に悦びてエポデとテラピムと彫める像  
 とを取て民の中に入る二一 斯てかれら身をめぐらしその子女と  
 家畜と財寶を前にたてて進みしが二二 ミカの家を遙かに離れし  
 時ミカの家に近きところの家の人々呼はり集てダンの子孫に追  
 ひつき三三 ダンの子孫を呼たれば彼等回顧てミカに言ふ汝何事  
 ありて集りしや二四 かれら言けるは汝らはわが造れる神々およ  
 び祭司を奪ひさりたれば我尚何かあらん然るに汝等何ぞ我にむ  
 かひて何事ぞやと言ふ五五 ダンの子孫かれに言けるは汝の聲を  
 我らの中に聞えしむるなかれ恐くは心の荒き人々汝に撃かか  
 るありて汝おのれの生命と家族の生命とを失ふにいたらんと二六  
 而してダンの子孫進みゆきけるがミカは彼らが己よりも強きを  
 見て身をめぐらして家に返れり二七 彼等ミカが造りし者とその

有し祭司をとりてライシにおもむき平穩にして安樂なる民の所  
 にいたり刃をもて之を撃ち火をもてその邑を燬たりしが二八 其  
 シドンと隔たること遠きが上に他の人民と交際さりしによりて  
 之を救ふ者なかりきその邑はベテレホブの邊の谷にあり彼ら邑  
 を建なほして其處に住み二九 イスラエルの生たるその先祖ダン  
 の名にしたがひて其邑の名をダンと名けたりその邑の名は本は  
 ライシなりき三〇 斯てダンの子孫その彫める像を安置りモーセ  
 の子なるゲルシヨムの子ヨナタンとその子孫ダンの支派の祭司  
 となりて國の尊はる時にまでおよび三一 神の家のシロにあ  
 りし間恒に彼等はミカが造りしかの彫める像を安置おきぬ  
 第一九章 一 其頃イスラエルに王なかりし時にあたりてエブライ  
 ムの山の奥に一人のレビ人寄寓をりベテレヘムユダより一人の  
 婦人をとりて妾となしたるに二 其の妾彼に背きて姦淫を爲し去  
 てベテレヘムユダなるその父の家にかり其所に四月といふ日  
 をおくれり三 是に於てその夫彼をなだめて携かへらんとてその  
 僕と二頭の驢馬をしたがへ起てかれの後をしたひゆきければそ  
 の父の家に之を導きいたりしに女の父これを見て之に遇ことを  
 悦こべり四 而してその女の父なる外舅彼をひきとめたれば則ち  
 三日これと共に居り皆食飲して其所に宿りしが五 四日におよび  
 て朝早く起あがり彼たちて去んとしければ女の父その婿に言ふ  
 少許の食物をもて汝の心を強くして然る後に去れよと六 二人す  
 なはち坐りて共に食飲しけるが女の父その人にいひけるは請ふ

幸に今一夜を明し汝の心を樂ましめよと七其人起て去んとしけるに外舅これを強たれば遂に復其所に宿り八五日におよびて朝はやく起いでて去んとしたるに女の父これに言けるは請ふ汝の心を強くせよと是をもて日の戻るまでとどまりて共に食をなしけるが九其人つひに妾および僕とともに去んとて起あがりければ女の父彼に言ふ視よ今は日暮なんとす請ふ今夜を明されよ視よ日昃たり汝此にやどりて汝の心をたのしませ明日蚤く起て出た汝の家をいたれよと一〇然るに其人止宿ることを肯はずして起て去りエプスの對面に至れり是はエルサレムなり鞍おける二の驢馬彼とともにあり妾も彼とともになりき一彼らエプスの近傍に在る時日はや没んとしければ僕その主人にいひけるは請ふ來れ我等身をめぐらしてエプス人の此邑にいりて其所に宿らんと二その主人これに言けるは我等は彼所に身をめぐらしてイスラエルの子孫の邑ならざる外國の人の邑にいるべからずギベアに進みゆかんと三すなはちその僕にいひけるは來れ我らギベアからマカ是等の處の一に就て止宿んと四皆すすみ往きけるがベニヤミンのギベアの近邊にて日暮たれば五ギベアにゆきて宿らんとて其所に身をめぐらし入て邑の衢に坐しけるに誰も彼を家に接て宿らしむる者なかりき一六時に一人の老人日暮に田野の働作をやめて歸りきたる此人はエフライム山の者にしてギベアに寄寓れるなり但し此處の人はベニヤミン人なり一七彼目をあげて旅人の邑の衢に在るを見たり老人すな

はちいひけるは汝は何所にゆくなるや何所より來れるやと一八その人これにいひけるは我らはベテレヘムユダよりエフライム山の奥におもむく者なり我は彼所の者にて既にベテレヘムユダにゆき今エホバの室に詣らんとするなるが誰もわれを家に接ものあらず一九然と驢馬の糞も飼藁もあり又我と汝の婢および僕等ともなる少者の用ふべき食物も酒も在て何も事缺るところなし二〇老人いひけるは願くは汝安かれ汝が需むる者は我そなへん唯衢に宿るなかれと二三かれをその家に携れ驢馬に飼ふ彼らすなはち足をあらひて食飲せしが三その心を樂ませをる時にあたりて邑の人々の邪なる者その家をとりかこみ戸を打たきて家の主人なる老人に言ふ汝の家に来たれる人をひき出せ我らこれを犯さんと三是に於て家の主人なる人かれらの所いでゆきてこれに言けるは否わが兄弟よ惡をなす勿れ此人すでにわが家にいりたればこの愚なる事をなすなかれ四我が處女なる女と此人の妾とあるにより我これを今つれいだすべければ汝らかれらを辱しめ汝等の好むところをこれに爲せ唯この人には斯る愚なる事を爲すなかれと五然るにその人々これを聽いれざるにより其人その妾をとりてこれを彼らの所にいだしやりければすなはちこれを犯して朝にいたるまで終夜これを辱しめ日のいづる頃にいたりて釋てり一六是をもて婦黎明にきたりてその夫の在る彼人の家の門に仆れ夜のあるまで其處に臥する二七その主朝におよびておきいで家の戸をひらきて去んと

せしがその妾の婦の家の門にたふれをりて手を鬭の上におくを見ければ二八これにむかひ起よ我ら出往んと言たれども何の答もあらざりき是によりてその人これを驢馬にのせたちて己の所におもむきしが二九家<sup>いへ</sup>にいたるにおよびて刀をとり其妾を執へて骨ぐるみこれを十二分にたちわりて之をイスラエルの四方の境におくりければ三〇之を見る者皆いふイスラエルの子孫がエジプトの地より出のぼりし日より今日にいたるまで斯のとき事は行はれしことなく見えしことなし思をめぐらし相議りて言ふことをせよ

第二〇章一是に於てイスラエルの子孫ダンよりベエルシバにいたりギレアデの地にいたるまで皆出きたり其會衆一人のごとくにしてミツパに於てエホバの前に集り二衆民の長たる者すなはちイスラエルの諸の支派の長等みづから神の民の集會に出づ劍をぬくところの歩兵四十萬人ありき三ベニヤミンの子孫はイスラエルの子孫がミツパにのぼれることを聞き斯てイスラエルの子孫此惡事の様を語れと言ければ四彼殺されし婦の夫なるレビの人こたへていふ我わが妾とともにベニヤミンのギベアに宿らんとて往たるに五ギベアの人起りたちて我をせめ夜の間に我がをる家をとるかこみて我を殺さんと企て遂にわが妾を辱しめてこれを死しめたれば六我わが妾をとらへてこれをたちわり是をイスラエルの産業なる全地に遣り是は彼らイスラエルにおいて淫事をなし愚なる事をなしたればなり七汝等は皆イスラ

エルの子孫なり今汝らの意見と思考をのべよ八民みな一人のごとくに起ていひけるは我らは誰もおのれの天幕にゆかずまた誰もおのれの家におもむかじ九我らがギベアになさんとこの事は是なりすなはち鬭にしたがひて之を攻ん一〇我らイスラエルの諸の支派の中に於て百人より十人千人より百人萬人より千人を取りて民の糧食を執せ之をしてベニヤミンのギベアにいたり彼らがイスラエルにおこなひたるその愚なる事にしたがひて事をなさしむべしと二斯イスラエルの人々皆あつまりて此邑を攻んとせしが其相結べること一人のごとくなりき三イスラエルの諸の支派遍く人をベニヤミンの支派の中に遣して言ひめけるは汝らの中に此惡事のおこなはれしは何事ぞや三然らばギベアにをるかの邪なる人々をわたせ我らこれを誅して惡をイスラエルに絶べしと然るにベニヤミンの子孫はその兄弟なるイスラエルの子孫の言を聴いれざりき四却てベニヤミンの子孫は邑々よりギベアにあつまりて出てイスラエルの子孫と戦はんとす五その時邑々より出たるベニヤミンの子孫を數ふるに劍をぬく所の人二萬六千あり外にまたギベアの居民ありて之をかぞふるに精兵七百人ありき六この諸の民の中に左手利の精兵七百人あり皆能く投石器をもて石を投るに毫末もたがふことなし七イスラエルの人を數ふるにベニヤミンを除きて劍をぬくところの者四十萬人ありき是みな軍人なり八爰にイスラエルの子孫起あがりてベテルにのぼり神に問て我等の中孰か

最初さいしょにのぼりてベニヤミンの子孫こひとと戦たたかふべきやと言いふにエホバ、ユダ最初さいしょにと言いたまふニイスラエルの子孫こひとすなはち朝あさおきてギベアにむかひて陣ちんをとりけるがニイスラエルの人々ひとびとベニヤミンと戦たたかはんとて出いでゆきイスラエルの人々ひとびと行伍ぎんごをたててギベアにて彼らかれと戦たたかはんとしければニベニヤミンの子孫こひとギベアより進すすみいで其日そのひイスラエル人ひと二萬まん二千せんを地に撃うちたふニ三さん然しかるにイスラエルの民たみ人々ひとびとみづから奮はひその初はつめの日ひに行伍ぎんごをたてし所にまた行伍ぎんごをたてたりニ而しかしてイスラエルの子孫こひと上うりゆきてエホバの前に夕暮ゆふぐれまで哭なきエホバに問とふ我復進われまたすすみよりて吾兄弟わがきやうだいなるベニヤミンの子孫こひととたたかふべきやとエホバ彼かれに攻せめのばれと言いたまへりニ四よ是こゝに於あいてイスラエルの子孫こひと次日つぎまたベニヤミンの子孫こひとの所に攻せめよするにニ五ごベニヤミンまた次の日つぎギベアより進すすみて之これにいで再びイスラエルの子孫こひと一萬まん八千人せんにんを地に撃うちたふ是こゝれはみな劍けんをぬくところの者ものなりきニ六ろく斯しか在ありしかばイスラエルの子孫こひとと民たみみな上ありてペテルにいたりて哭なき其處そこにてエホバの前に坐すわりその日の夕暮ゆふぐれまで食しを斷たち燔祭はんさいと酬恩祭しゅうおんさいをエホバの前に獻ささげニ七しち而しかしてイスラエルの子孫こひとエホバにとへり(その頃ころは神かみの契約けいやくの櫃こ彼處こゝにありてニ八はちアロンの子こエリアザルの子こなるピネハス當時そのときこれに事つかへたり)即すなはち言いけるは我われまたも出いでわが兄弟きやうだいなるベニヤミンの子孫こひととたたかふべきや或または息やむべきやエホバ言いたまふ上うれよ明日あす日はわれ汝ななの手にてかれらを付わたすべしとニ九くイスラエル是こゝに於あいてギベアの周圍まわりに伏兵ふくへい

を置おきニ〇じゅう而しかしてイスラエルの子孫こひと三日みつかめ目にまたベニヤミンの子孫こひとの所に攻せめのぼり前まへのごとくにギベアにむかひて行伍ぎんごをたてたればニ一いちベニヤミンの子孫こひと民たみに出いであひしが遂つひに邑まちより誘あひ出いたり彼等かれら始はじめは民たみを撃うち大路おほぢにて前まへのごとくイスラエルの人ひと三十じふにん人にん許ゆるを殺ころせりその大路おほぢは一筋ひとすぢはペテルにいたり一筋ひとすぢは野ののギベアに至いたるニ二にベニヤミンの子孫こひとすなはち言いふ彼らかれは初はじめのごとく我らわれに撃うち破やぶらると然しかるにイスラエルの人は云いふ我等われら逃にげて彼らかれを邑まちより大路おほぢに誘あひ出いさんとニ三さんイスラエルの人々ひとびとみなその所ところを起たて去さりバアルタマルに行伍ぎんごをたてたり而しかして伏兵ふくへいその處ところより即すなはちギベアの野原のほらより起おこれりニ四よイスラエルの全軍ぜんぐんの中うちより選えり拔はたる兵へい一萬まん來きたりてギベアを襲おそふ其戰鬪そのたたかひはげしかりしがベニヤミン人は蓄害たくわいの己おのれにのぞむをきざりきニ五ごエホバ、イスラエルのまへにベニヤミンを撃うち敗やぶりたまひしかばイスラエルの子孫こひとその日ひベニヤミン人ひと二萬まん五千せん一いち百人ひゃくにんを殺ころせり是こゝれはみな劍けんをぬくところの者ものなりニ六ろくベニヤミンの子孫こひとすなはち己おのれの撃うち敗やぶらるるを見みたり偕ともイスラエルの人々ひとびとそのギベアにむかひて設たたる所の伏兵ふくへいを待まちてベニヤミン人ひとを避さけ退しりぞけるがニ七しち伏兵ふくへい急いそぎてギベアに突つき入り伏兵ふくへい進すすみて刃やいばをもて邑まちを盡ことごとく撃うちりニ八はちイスラエルの人々ひとびととその伏兵ふくへいとの間あひだに定さだめたる合圖あひづは邑まちより大おほなる黒烟くろけむりをあげんとの事ことなりきニ九くイスラエルの人々ひとびと戰陣せんじんより引ひき退しりぞくベニヤミン初はじめが程ほどはイスラエルの人々ひとびとを撃うちて三千せん人にん許ゆるを殺ころし乃すなはち言いふ彼等かれらはまことに最初はじめの戰いくのごとく我等われらに撃うち

やぶらると四〇然るに火焰の柱なして邑より上りはじめしかばベニヤミン人後を見かへりしに邑は皆烟となりて空にのぼる四一時にイスラエルの人々ふりかへりしかばベニヤミンの人々皆害のおのれに迫るを見て狼狽へ四イスラエルの人々の前より身をめぐらして野の途におもむきけるが戦闘これに追せまりて遂にその邑々よりいでたる者どもその中に戦死す四三イスラエルの人すなはちベニヤミン人を取りまきて之を追うち容易くこれを踏たふして東の方ギベアの對面にまでおよべり四四ベニヤミンの仆る者一萬八千人はみな勇士なり四五茲に彼等身をめぐらして野の方にげりンモンの磐にいたれりイスラエルの人大路にて彼等五千人を伐とり尙もこれを追うちてギドムにいたりその二千人を殺せり四六是をもて其日ベニヤミンの仆れし者は劍をぬくところの人あはせて二萬五千なりき是もみな勇士なり四七但六百人の者身をめぐらして野の方にのがれりンモンの磐にいたりて四月があひだりンモンの磐にをる四八是に於てイスラエルの人々また身をかへしてベニヤミンの子孫をせめ刃をもて邑の人より畜にいたるまで凡て目にあたる者を撃ち亦その至るところの邑々に火をかけたなり

第二章 イスラエルの人々曾てミツパにて誓ひ曰けるは我等の中一人もその女をベニヤミンの妻にあたる者あるべからずと三茲に民ベテルに至り彼處にて夕暮まで神の前に坐り聲を放ちて痛く哭き三言けるはイスラエルの神エホバよなんぞイスラ

エルに斯ること起り今日イスラエルに一の支派の缺るにいたりしやと四而して翌日民蚤に起て其處に壇を築き燔祭と酬恩祭をささげたり五茲にイスラエルの子孫ひけるはイスラエルの支派の中に誰か會衆とともに上りてエホバにいたらざる者あらんと其は彼らミツパに來りてエホバにいたらざる者の事につきて大なる誓をたてて其人をばかならず死しむべしと言たればなり六イスラエルの子孫すなはち其兄弟ベニヤミンの事を憫然におもひて言ふ今日イスラエルに一の支派絶ゆ七我等エホバをさして我らの女をかれらの妻にあたへじと誓ひたれば彼の遺る者等に妻をめとらしめんには如何にすべきや八又言ふイスラエルの支派の中孰の者がミツパにのぼりてエホバにいたらざると而して視るにヤベシギレアデよりは一人も陣營にきたり集會に臨める者なし九即ち民をかぞふるにヤベシギレアデの居民は一人も其處にをらざりき〇是に於て會衆勇士一萬二千を彼處に遣し之に命じて言ふ往て刃をもてヤベシギレアデの居民を撃て婦女兒女をも餘すなかれ二汝ら斯おこなふべし即ち汝等男人および男と寝たる婦人をば悉く滅し盡すべしと三彼等ヤベシギレアデの居民の中に四百人の若き處女を獲たり是は未だ男と寝て男しりしことあらざる者なり彼らすなはち之をシロの陣營に曳きたる是はカナンの地にあり三斯て全會衆人をやりてリンモンの磐にをるベニヤミン人と語はしめ和睦をこれに宣しめたれば四ベニヤミンすなはち其時に歸り

きたれり是において彼らヤベシギレアデの婦人の中より生しおきたるところの女子をこれにあたへけるが尚足ざりき二五エホバ、イスラエルの支派の中に缺を生せしめたまひしに因て民ベニヤミンの事を憫然におもへり二六 會衆の長老等いひけるはベニヤミンの婦女絶たれば彼の遣れる者等に妻をめとらせんには如何すべきや二七 又言けるはベニヤミンの中の逃れたる者等に産業あらしめん然らばイスラエルに二の支派の消ることなかるべし二八 然ながら我等は我等の女子を彼らの妻にあたふべからず其はイスラエルの子孫誓をなしベニヤミンに妻を與ふる者は詛はれんと言たればなりと一九 而して言ふ歳々シロにエホバの祭ありと其處はベテルの北にあたりてベテルよりシケムにのぼるところの大路の東レバナの南にあり二〇 是に於てかれらベニヤミンの子孫に命じて言ふ汝らゆきて葡萄園に伏して窺ひ二一 若シロの女等舞をどらんと出きたらば葡萄園より出でシロの女の中より各人妻を執てベニヤミンの地に往け二三 若その父あるひは兄弟來りて我らに懇へなば我らこれに言ふべし請ふ幸に彼らを我らに取せよ我等戰爭の時に皆ごとごとくその妻をとりしにあらざればなり汝等今かれらに與へしにあらざれば汝等は罪なしと二三 へニヤミンの子孫すなはちかく行なひその踊れる者等を執へてその中より己の數にしたがひて妻を取り往てその地にかへり邑々を建なほして其處に住り二四 斯てイスラエルの子孫その時に其處を去て各人その支派に往きその族にいたれ

り即ち其處より出て各人その地にいたりぬ二五 當時はイスラエルに王なかりしかば各人その目に善と見るところを爲り